

第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイ 大賞受賞作家・西條茜インタビュー



《Phantom Body- 蜜と泉-》という作品で、第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイの大賞を受賞した西條茜さん。中が空洞になっている陶器に人の体との共通点を見出し、複数人で陶に息や声を吹き込むと音が響いて空間全体をひとつにできる「装置」として作品を制作したそうです。西條さんにこれまでの制作活動や、作品に込めた思いなどをいつも制作しているスタジオで聞きました。

—パフォーマーたちが大きな陶器の穴に息や声を吹き込むと、その音が陶器の中で1つになって周りの空間に広がって、見ている人たちも含めて一つになる—。パフォーマンスを生で見ると、陶器が集まったり離れたりしながら、パフォーマーたちの体の空洞と陶器の空洞がつながってやりとりをする様子は、まさにタイトルにある「蜜」や「泉」に呼び寄せられた時に起きる、原始的でありながら新しいコミュニケーションのようでした。

西條

みんなが寄ってくる場所なだけで、ずっと永遠にそこに居続けるわけでもない。つながりけどつながっていない時もあって、それが自然で。蜜でお腹いっぱいになったり水で喉の渇きが癒えたりしたらいなくなって、また喉が乾いたら来て、そういう繰り返しの場所というイメージです。



—見ると楽器のようにも見えますが、場を作る装置ということですね。

西條

この作品は音を出すことが目的ではないので、楽器だと思われないように心がけています。もちろん楽器にも人と人を繋ぐという側面はあるのかもしれませんが、この作品は体と体を接続する装置で、作品と音を通してパフォーマーのいる空間と、見ている人が繋がっている感覚になってもらえたらいいなと思っています。



—タイトルの Phantom Body の部分にはどのような意味が込められているのでしょうか。

西條

Phantom (ファントム)には幻影や幻という意味があるので、Phantom Bodyは移ろいゆく不安定な体の状態を指します。身体ってまるで捉えどころのない不確実なものだによく感じていました。持病の喘息の症状が悪化した時や、他者とのコミュニケーションを通してそう感じることは少なくありません。誰かをなくした時や、コロナ禍も、自分と他者の存在や体のありかについて意識せざるを得ない時間でした。だから道具を使わずに素手で粘土に触って作品を作るということは、「自分の体は少なくともここに存在するんだ」と自分で確認することに繋がっていると思っています。

ここ数年、保育園で子どもたちに陶芸を教えているんですが、粘土に触ってできた跡を見て、自分がここにいて安心感を得られる子もいるらしいです。粘土を触ることが好きな子は多いですね。そうやって身体を通して思考し続けることでしか捉えられない世界があると感じています。

—陶芸との出会いはいつですか。

西條

高校生の時に美大に入ろうと思って絵を描いていたんですが、あんまり成績が良くなかったので(笑)倍率が低いという理由もあって工芸科に進みました。そこで粘土に触ったら、素手で作り上げるというのが楽しくて、自分に合っていると思ったんです。筆やカンナではなくて、手で触れて何かを作り上げる。すごくプリミティブで面白い、と。今も絵を描くこともあるのですが、指で描いたりしますね。直接触るということで安心するのかもしれないですね。



—陶器と人の体が同じ空洞を持っている、という共通点の「発見」はなかなかできないと思います。身体への関心はどこから来ているのですか。

西條

父が医療関係の仕事をしていて、私が小さい頃に家のテレビに内視鏡の映像を映し出していました。肩の専門で、関節のところに水を入れて膨らませてその中を見る、みたいな手術の映像です。苦手な人もいるかもしれませんが、私はそういうのが好きでよく父の仕事を見ていました。家には小さな人体模型のおもちゃや、手塚治虫の漫画『ブラックジャック』もありました。内視鏡の映像を見て、体は中身が詰まっている塊ではなくて、筋肉の壁があって空洞があるっていうのがすごく面白く思えました。

その原体験を、陶芸を始めた時に思い出しました。陶芸では、爆発を防ぐためにチューブ状になるように粘土を積んでいて、中に空洞を作っていきます。制作中に上から陶器を覗き込んだ時の風景が、あの内視鏡の映像にリンクしたんですね。



—それから空洞を意識するようになった？

西條

そうですね。でも、まずは空洞を活かすよりも、空洞があるボディを作る意味に疑問を感じました。陶芸では粘土で1つの形を作って、その上に釉薬を塗ります。見ているのは釉薬がある表面なのに、わざわざ空洞にする意味はあるのかなって。表面の塗膜だけで作品が作れないかと思ってる、釉薬だけでできての彫刻を作ったりしました。粘性を高めた釉薬とボディの間に剥離剤を塗って、ポコッと表面だけが外れるようにしました。皮を剥いだ感じですね。

—空洞を活かして周囲とつながる、という方向に変わるきっかけは何だったのですか。

西條

リサーチのために各国の焼き物の街に行って、その物語を紐解いて作品を作るということも取り組んでいました。そしてコロナ禍の前に行ったフランスでのリサーチで、16世紀の陶工のベルナルド・パリッシーについて知りました。焼き物で人工洞窟を作っていた人です。人工洞窟は別名「グロッタ」というんですけども、グロテスクにつながる言葉ですね。洞窟の中のドロドロに音が生かされた感じが釉薬を塗りたくって再現していました。さらに調べていくと、風が吹くと洞窟の中に音が鳴るような仕組みも作っていたんですね。洞窟も体のイメージに喩えられたりしますね。それで焼き物に息を吹き込んで見たら面白いかなと思って、リサーチの成果発表会で息を吹くパフォーマンスをしました。帰国後はコロナ禍でリサーチにも行けなくなってしまったので、もうちょっとそれをやってみようと思いました。原点に立ち戻って、身体について改めて考える、ということもありました。コロナ禍で人との繋がりに飢えていたこともあり、身体が陶器を介してつながるという発想になった部分もあるかと思っています。

—最初は一人で息を吹き込んでいたんですね。

西條

最初は1つ穴が空いていたのが、人が増えていくと色々な関係性が生まれるから面白いんじゃないかって増やしていきました。人間が3人以上集まると嫉妬という感情が生まれる、とどこかで聞いたことも思い出して、より複雑なコミュニケーションが生まれるんじゃないかって。パフォーマーたちの動きやコミュニケーション、見る人それぞれが自分の状況に重ねながら感じ取ってもらえたら面白いなあと思っています。



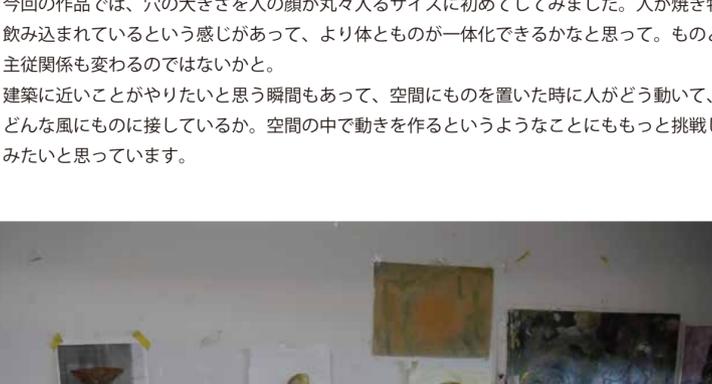
—ミモカで展示している作品は、その大きさも強い印象を残します。

西條

ミモカで展示している作品は、台の上に置いてあります。安定させるためという意味もあるんですが、ギリシャ神話のニンフ3人が銅像の上に登っているような彫刻作品もあるので、パフォーマーが台の上に乗って、体がまるで彫刻のように見える面白さもあるのではないかと。パフォーマンスの時に、ものとの主従関係みたいなものが反転する瞬間があることにも興味を持っています。お茶碗を持っていると、人間がお茶碗を持っている感じがあると思うんですけども、ものが大きいものになると、ものに人が寄り添っているっていう感じになるので、そういう反転を見たいとも思っています。

今回の作品では、穴の大きさを人の顔が丸々入るサイズに初めてしてみました。人が焼き物に飲み込まれているという感じがあって、より体とものが一体化できるかなと思って。ものとの主従関係も変わるのではないかと。

建築に近いことがやりたいと思う瞬間もあって、空間にものを置いた時に人がどう動いて、どんな風にものに接しているか。空間の中で動きをするというようなことにももっと挑戦してみたいと思っています。



—2024年度以降にミモカで個展を開催予定です。アイデアは色々ありそうですね。

西條

今は布にも興味があります。身体を包んでいるものが布だったりもしますし、身体との関係性を考えた時にすごく自然な素材として見えています。焼き物は風で揺れるということはないんですが、布だと空間の中の空気の流れに合わせて揺れますね。布と焼き物を合わせたような展示をしてみたいなと思っています。